

2026 年 8 月 30 日聖餐礼拝

『主であることを知る心』

エレミヤ24:4～7

開会賛美:聖歌229 おどろくばかりの

応答賛美:聖歌609 いちど死にしわれをも

聖書箇所

4 すると、私に次のような主のことばがあった。

5 「イスラエルの神、主はこう言う。わたしは、この場所からカルデア人の地に送ったユダの捕囚の民を、この良いいちじくのように、良いものであると見なそう。

6 わたしは、彼らを幸せにしようと彼らに目をかける。彼らをこの地に帰らせ、建て直して、壊すことなく、植えて、引き抜くことはない。

7 わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。

導入

今年に入ってつくづく思われることがあります。それは、私は何て神様を知らないんだろうということです。体調を崩して今年の初めに3ヶ月半の療養期間をいただいたのですが、この療養期間はまさに私が神様について何も知らないと言うことをまざまざと見せつけられる時間でもありました。回復を図るために様々なことをしました。病院に行ったり、気分転換をしたり、ただただ休んだり。心のどこかに焦りがあったと思います。早く回復しなくては。早く戻らなくては。たくさんの人に心配や迷惑をかけている。やらなきゃいけないことがまだたくさんあるんだ。そんな思いをどうしても消せなかったのです。赦されないようなことをしてしまっているという罪悪感もあったように思います。

そんな中、ある本を読みました。そこにはクリスチャンがどのような存在であるのかについて、次のような言葉がありました。“キリスト者とは、自分で自分を赦すことができないにもかかわらず、神は自分を赦してくださったと悟っている人のことである。言い換えれば、自分が赦されている事実には驚いている人のことである。”この言葉を見た時、自分の中に、神様が今の私をどのように見ておられるのかという考えが全く無かったことに気がつきました。私には焦りがあり、罪悪感があり、失望があった。私は、私が赦されないようなことをしていると思い込んでいるけども、神様はそうではないのではないか。だって神様はイエス様を通して私の罪を赦すと言ってくださっているのだから。そう思うと、心の中に安らぎが与えられるのを感じたのです。本当に、本当に、神様の思いを全く知らなかった私の姿を発見したことを告白します。

礼拝に集う皆さん。私たちは今、神様を礼拝するためにこの場にいます。私たちが心から献げる礼拝を受け

取られる方を、私たちはどのように知って、受け止めているでしょうか。どんな方として知っているのでしょうか。もしかしたら、私のように忘れてしまっていないでしょうか。本日は聖餐礼拝です。私たちのために流された、救い主イエス・キリストの血潮と裂かれた肉を思い、感謝する時を持ちましょう。聖餐式にあたって、基本的なことを考えてみましょうか。イエス様はなぜ十字架の上で血を流されたのでしょうか。私たちに神様を知らせるためであると言えます。イエス様の血潮の意味をしているからこそ、私たちは神様が私たちに注がれた愛を知ることができるからです。イエス様の肉はなぜ裂かれたのでしょうか。神様が私たちへ注がれた愛の大きさを知るためです。イエス様の肉が裂かれ、死んだことによって、一人子を死なせるほどの大きな愛を注がれたことを私たちは知のです。この時間、聖書のみことばから、私たちに限りない愛を注がれた神様が私たちの主であることを知ることができるように願います。

本文Ⅰ：主であることを知る心

4 すると、私に次のような主のことばがあった。

5 「イスラエルの神、主はこう言う。わたしは、この場所からカルデア人の地に送ったユダの捕囚の民を、この良いいちじくのように、良いものであると見なそう。

6 わたしは、彼らを幸せにしようと彼らに目をかける。彼らをこの地に帰らせ、建て直して、壊すことなく、植えて、引き抜くことはない。

このみことばが預言者エレミヤを通して伝えられたのはバビロンの捕囚となっていた民です。Ⅰ節に年代の説明がありますが、簡単にこの時の背景を説明しますと、かつてイスラエルの国はバビロンによって滅ぼされ、自由を奪われ、文化を奪われ、家族を奪われ、財産を奪われました。そして、捕囚の民として連れて行かれたのです。捕囚の民として連れて行かれたのは指導者、技術者、国家にとってかけがえのない人たちでした。残されたのは貧しい民衆であったといえます。捕囚に連れて行かれた人たちは長く、苦しみや屈辱に耐えなければなりません。一方で残された人たちは、エルサレムに住むことが許されているということを根拠に、自分たちはもう大丈夫だと、楽観的な考えを持つようになったのです。さらには、偽預言者たちの甘い言葉に乗り、自分たちの平安は続くのだと思い込んでいました。

神様からみことばが与えられた時、エレミヤはカゴの中の二つのいちじくを見ていました。一つはよいいちじく、もう一つは悪いいちじくです。そんな彼に神様は言われます。バビロンに連れて行かれたあの民こそ、神様にとってよいいちじくである、と。捕囚の苦しみを受けているあの民こそが、神様にとって非常によい実であると言われるのです。これは私たちにとって驚くべき言葉です。人間の考えとは逆だからです。人の思いはこうです。苦しみがなければ私は心から信じるができるだろう。私の生活が豊かになり、安らかであるからこそ、神様が私を愛してくださっていることを知ることができる。だから、もっと、もっと祝福がほしい。ですが、神様の思いは違います。神様の民として歩むことに環境は何の関係もないのではないと神様は言われるのです。捕囚の中でもあっても良いいちじくの実となることができます。私たちの周りの環境というのは関係ないのです。

事実として、バビロン捕囚となった民が良いいちじくと言われたのは祝福を求めていたからではありません

でした。**7 節**

7 わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。

彼らは、彼らの神様に立ち返ったといいます。それこそが、彼らに神様が主である心が与えられた理由であるということです。祝福や、環境で彼らは主であることを知ることはできないと、神様ははっきりと言われます。

“主であることを知る”ということばに注目してみましょう。このことばは聖書の中で71回登場します。その時の状況を見ますと大きな災いの中や苦難の中で主であることを知るようになるといった内容がほとんどであることがわかります。飢饉があつてから主であることを知る。戦争で負けてから主であることを知る。国が減ってから主であることを知るといったようにです。人生の中で浮き沈みというのは必ずあります。その中で、神の子とされためぐみを確信する者は、当たり前のように祝福を求めることでしょう。神様の子となったのだから、豊かな人生を夢見ることでしょう。自分をとりまく環境が良いものとなることを願うことでしょう。もちろん、人生の豊かさや良い環境と言うのは、私たちに与えられる祝福の一つではあります。しかし、豊かさや祝福の中では、神様は、人が主であることを知るとは言われません。豊かさを求める前に、神様を信じる者がすべきことがあるからです。祝福ではなく、主であることを知る心が与えられることを、求めるのが先なのです。

71回の“主であることを知る”という表現の中で、本文にのみ続く表現があります。それが“心を与える”と言うことです。心とは意思、魂、求めと言い換えることができるでしょうか。神様を信じることで与えられる祝福を求めるものではありません。神様が私の主であることを知り、確信し、決して揺るがないことを求めるのです。

以前あるインタビューの記事を目にして驚いたことがあります。大変なお金持ちの方がいました。その人はお金を稼ぐという才能があり、その分野で成功していました。自分が300歳まで思いつく限りの贅沢な暮らしをしても、決して使いきれないくらいのお金があったのです。ですが、彼は今もお寝る間を惜しんで働いています。記者の方が聞きました。あなたはもう働かなくてもいいですよ？引退はしないのですか？彼は答えます。もう少し貯蓄が増えたら引退を考えます。…。いくらお金があっても、人の考える幸せがあっても、なんて虚しいのでしょうか。祝福、豊かさ、良い環境。いいものですね。知らず知らずのうちに求めてしまうものですね。でも、神様が私の人生にいることを知らなければ、それらの行き着く先は虚しさです。自分は平安だ、幸せだといくら声高々に叫んでも、その中心に神様がいないければ、虚しいのです。

よいいちじくとなるのは、主であることを知る心を持っている者です。自分の人生に主である神様を求める者です。神様に立ち返ることのできる者です。私たちの心は今何を求めているでしょうか。祝福でしょうか。良い環境でしょうか。それとも私の人生に欠かすことのできない神様が主であることを知ることでしょうか。どうか、神様に立ち返っていただきたいと思います。神様から、主であることを知る心が与えられる私たちとなることを願わずにはられません。

本文2:立ち返る／主の望み

では主に立ち返るということを 7 節のみことばを通して詳しく見ていきたいと思います。

7 わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。

ここにある通り、主であることを知る心が与えられる根拠とは、神様に立ち返ることです。立ち返るということは、一度離れている、争うと言うことが前提になりますね。人はとにかく神様と争うことを選びます。とにかく、神様から離れようとし、残念ながら、それは神様を信じる者もまた同じです。神様のめぐみはいいものだけど、自分の欲や罪、自分の思い通りの人生を歩みたい。そんな思いで満たされているのが私たちの心の中にあるのです。聖書はこれを人間の基本的な罪であると言います。だから、罪の赦しが必要で、悔い改めが必要になってくるのですが、神様に立ち返るということが正に悔い改めることになるのです。離れていた者が戻ってくるというこの神様への立ち返りは、神様が人に望むことでもあるのです。

主であることを知る心とは、主の望みを知る心を知ることと言えるのではないのでしょうか。では主の望みとはなにか。私たちの人生の中で、どんな状況に置かれているとしても神様とともに歩むこと。自分に注がれている愛を知ることなのです。正に神様への立ち返りですね。捕囚の民を良いいちじくであると認められた神様。どのような気持ちでそうされたのかを想像します。私の想像ではふた通りでした。しょうがないから認めてやるよといった気持ちと、喜んで認めているという気持ちです。でもやはり、おそらく喜んでおられたのではないかと思います。その根拠は神様が人に何を望んでおられるかということにあるのです。

みなさんは考えたことがあるでしょうか。そもそも神様は私たちに何を望んでおられるのだろう、と。何を望んでイエス・キリストを十字架につけてまで、私を救ってくださったのだろう、と。**エペソ2:14～18**

14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、

15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、

16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。

17 また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。

18 このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。

キリストを通して、神様に近づくことのできる者へと変えられたのが私たち、クリスチャンです。神様は私たちが神様に近づくために、言い換えるなら、離れることがないようにするために、神様はイエス様をこの世に送り、十字架につけ、肉を裂き、血を流したのです。神様がそうまでしてでも望むこと。それが、私たちがイエス・

キリストにあって神様に立ち返ることです。神様に近づくことなのです。

今、私たちは神様に立ち返ろうではありませんか。主の望みを知り、主であることを知る心を与えられている者として、歩いていこうではありませんか。

結論

ローマ8:35～39において使徒パウロはこうに告白します。

35 だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

36 こう書かれています。

「あなたのために、私たちは休みなく殺され、
屠られる羊と見なされています。」

37 しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。

38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、

39 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

私たちを神様から離すものはありません。私たちに注がれている神様の愛を失わせるものなどありはしないのです。もし、神様のことを知らないとしたら、それをしているのは、私です。苦難でも、苦悩でも、迫害でも、上でも、裸でも、危険でも、剣でも、死でも、いのちでも、御使いたちでも、支配者たちでも、今あるものでも、後に来るものでも、力あるものでも、高いところにあるものでも、深いところにあるものでも、そのほかのどんな被造物でもありません。神様から離れてしまっている私なのです。主に愛されている皆さん。私たちは神様に立ち返ろうではありませんか。

7 わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。

私には主であることを知る心を与えられている。この確信を持って歩む私たちでありたいと、心から願います。